

年は、母校にとつて文字通り多難の年であった。
『国難』になぞらえて『校難』の語が出来たのもこの年である。

この年四月に鈴木校長が辞任してから翌八年三月に佐々木哲郎校長が就任するまでの約一年間、栃内校長のわずかな在任期間を除いて岩手中学の学校長事務取扱に就いて難局に当たったのは、義正翁の実弟・三田俊次郎である。

当時、俊次郎はみずからが設立した岩手医学専門学校（現在の岩手医科大学）の校長でもあり、多忙を極める身であった。したがって岩中への出校はまれであり、校務連絡のため、使丁が毎日定期便のように医専と岩中のあいだを往復した。三回生は三田学校長事務取扱から卒業証書を授与されたが、生徒たちが専任の校長を欲していたことは言うまでもない。専任の校長がいけないということは、生徒の気持ちを擱んで引っ張っていく旗印がないようなもので、学園には落ちつかない空気が漂っていた。鈴木校長の後を追うように中心的な何人かの教師が辞めていったことも、生徒たちの気持ちをいっそう動揺させた。

悪いときには悪いことが続くものである。昭和四年秋のニューヨーク・ウォール街の株価暴落に端を発した世界恐慌の波が折しも日本に押し寄せ、昭和六年一月、未曾有の恐慌が岩手県を痛打した。銀行は倒産し、富豪巨商で資産を失う例が続発した。義正翁の關係する広範な

事業もその打撃を受け、岩手奨学会の資産もまた災厄を被った。

この時期、深刻な不況で本校への入学志願者が激減した。昭和五年には志願者一三六名、合格者九〇名であったのに対し、昭和六年には志願者六九名、合格者四四名と一挙に半減している。この傾向は県立校でも同じであったが、創立からまだ日が浅い私立校にとつては存亡にかかわる問題であった。

幸い義正翁の出資によって岩手奨学会は経営の危機を脱した。しかし三、四回生が積み立てていた修学旅行のための貯金は銀行パニックによつてついに戻らなかつたのである。この衝撃は大きく、父兄・生徒と学校との信頼関係が根底から揺すぶられることとなつた。父兄からは学校の不手際を非難する声が澎湃として起り、生徒のなかにも学校を責めるような気持ちがあつた。授業料不払いの挙に出る者もいた。

こんなあるとき、試験の不正行為者に暴力による制裁を加える事件が起きた。自治会の名においての制裁であつたために、自治会の役員が処分の対象となつたが、この処分を不満とする五年生が同盟休校（ストライキ）に入つたのである。この同盟休校に思想的な背景はなく、学校側が処分を撤回したため数日で事件の解決を見たのであるが、いちど損なわれた生徒・学校相互の信頼関係が真に回復するには、かなり時間がかかつたようである。この騒ぎのうちに、

『校難』の昭和七年

その経緯は違つても、鈴木卓苗・栃内曾次郎というふたりの校長に相次いで去られた昭和七

盛岡中学とのラグビー定期戦も流れてしまった。

昭和七年の岩手中学は揺れに揺れた。まことに不幸な時代であったが、これも岩中がさらにたくましく発展していくための試練であった。